



查讀研究論文

REFEREED PAPERS

# パレート社会学から社会情報学へ

From Paretian Sociology to Socio-Informatics.

村館 靖之\*

Yasuyuki MURADATE

## 1. はじめに

### 1.1 研究目的と課題設定

本稿では課題設定としてパレート社会学を社会情報という観点から読み直すということと、不均衡進化論との接合を試みるという2つを挙げる。

現代社会を一言でまとめると社会的差異性の増大過程ということになる<sup>(1)</sup>。言い方を変えると、差異つまり情報が社会の中で膨張し、拡大している。この差異性は経済的利潤を生み出し、経済発展を生み出す源泉となっている。一方で、その差異性ないし異質性は社会的な不安定性を生み出すという側面もある。

岩井（1997）によれば、現代社会はポスト産業資本主義社会と言われる。ダニエル・ベルは「脱工業化社会」と呼び、須藤（1995）では『複合的ネットワーク社会』と呼んでいる。論者によって、「高度情報化社会」や「知識社会」、「サービス社会」など名称は異なるが、その意味するところは同じである。それでは、岩井（1997）にならい「ポスト産業資本主義社会」の特徴を、本稿と関連付けて整理しておく。現代社会は、「情報」という形のもたな

いものを商品化して扱っている。そして情報は、岩井（1997）の主張するように「差異」の別名である。イノベーションとは差異を創造することであり、利潤とは創造された差異に対する報酬である。従来はモノの集積が経済発展の源泉であったが、経済のサービス化によって差異、つまり情報の集積が経済発展の源泉となっている。

しかし革新が頻繁に起る社会は安定性を欠く。また社会的な差異性ないし異質性は、社会を構成する階級間で、相互理解が進まないという欠点がある。この2つの論点はパレート社会学の特徴である。

パレート社会学はパレート『一般社会学概論』（イタリア語初版1916、第二版1923）によって展開されている。パレートは1848年に生まれ、1923年に75歳で生涯を閉じているので、『一般社会学概論』はまさにパレートのライフワークと言っても過言ではない。『一般社会学概論』は大きく分けて、非論理的行為、残基、派生、歴史上の社会均衡のパートから構成

\*東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻博士課程 須藤修研究室所属

キーワード：パレート、社会的異質性、効率性、社会均衡、社会進化

される。『一般社会学概論』はあまりに長い著作であったので、その要約本がエジプト考古学者ファリナ氏によって編集・出版されている。我々は要約本であるパレート『一般社会学提要』（1920）をベースに社会情報学の理論的發展のために、不均衡進化論に近い考え方を示していたパレートの社会学理論を再検討してみたい。

次の課題として、古澤満『不均衡進化論』（2010）を社会進化論に応用することで、パレート社会学と接合することを試みたい。古澤（2010）ではDNAベースの不均衡進化が保守と革新の葛藤によっておこると記述されている。この保守と革新の葛藤は、パレート社会学における結合本能（革新）の残基と集合体の持続（保守）の残基の葛藤・競合と解釈できるのではないだろうか。パレート社会学における残基とは非論理的行為を構成する人間精神における不変の定数項ないし原理である。古澤（2010）は生物学の立場から不均衡進化論を唱えているが、我々はパレート社会学の立場から、不均衡社会進化論への接合を試みたい。

まず不均衡社会進化を定義しなければならぬ。不均衡社会進化は、社会的な不均衡、つまり社会における階級の循環の不安定性や権力交替の不安定性によって社会システムが変動し、進化するという概念である。不均衡社会進化論はパレート社会学と不均衡進化論の接合によって構成される。パレート社会学は後述するように言葉通りの社会的な不均衡や社会進化論を支持してはいない。しかし、社会的な不均衡を保守と革新の2つの要素の葛藤とそれによる階級の循環の不安定性と解釈し、社会進化論に社会変動論が含まれるなら

ば、パレート社会学と不均衡進化論は強い親和性があると言える。社会進化が、社会的な変異の蓄積、パレートの言う社会的異質性と、その選択過程（エリートの周流）によって特徴付けられるとするならば、パレート社会学は一種の社会進化論を構成する。しかし、このパレート社会学の社会進化論への適用は、「進歩」といった要素を一切含まず、より厳密には社会変動論と言うべきであろう。

古澤（2010）は不均衡進化論を提唱し、その理論を社会理論に応用する可能性を示唆している。不均衡進化論は、DNAの複製過程における鎖の合成メカニズムが、遺伝つまり保守と、進化つまり革新の要素の対立によって構成されることを主張している。DNAの2重螺旋の非対称的な分子構造が複製される際に、エラーを含む多様性の創出部分と、元本保証を行う遺伝の部分という2つの要素が存在する。生命はDNAの複製レベルにおいて、保守と革新の葛藤を含んでいる。この両者の複合関係が、元本保障された多様性の創出を生み、柔軟な不敗の戦略と言うべき不均衡進化を生み出している。不均衡進化論は、生命における保守と革新の葛藤を分子レベルで議論している。このような保守と革新の競合過程を論じた不均衡進化論は、人間社会の解釈・理解にも適用が出来る可能性がある。

不均衡進化論には、進化の加速の視点や、進化の初期値依存性の指摘がある。環境ストレスを与えることによって、人為的に進化を加速するという生物学上の実験は、人間社会に直接適用することは出来ない。しかし、強い環境ストレスを受けた後に、進化が加速し、一種の大きな繁栄がも

たらされるという考え方は、大不況の後にイノベーションが発生し、好況がもたらされるという現象の説明につながる。同じ遺伝子を持つ生物種であっても、環境など与えられた進化の初期値によって別の種に分化する可能性があるという進化の初期値依存性の考えは、経済システムの歴史的経路依存性の考えに近い。

ヘーゲルの弁証法、止揚の考え方のように、2つの対立する要素から新しい要素に発展するという考え方は、西洋思想史上に古くから存在する。しかし、不均衡進化論の新しさは、分子レベル、DNAの2重螺旋の複製過程において、

## 1.2 関連する先行研究

パレート社会学に関しては彼の著作であるパレート『一般社会学概論』（1923）が代表的である。本研究ではテキストとしてイタリア語版に関しては1988年のUTET版、フランス語に関しては1968年の全集版を参照した。UTET版は決定版であるイタリア語第二版に基づき、仏訳、英訳の異同をも参照した最も信頼出来る『一般社会学概論』のテキストである。

さらにパレート『一般社会学概論』の要約本として、パレート『一般社会学提要』（1920）をイタリア語版で参照した。パレート社会学の邦訳としては、『一般社会学概論』の歴史上の社会均衡のパートに関する部分訳である『社会学大綱』（1987）、および要約本の邦訳である『一般社会学提要』（1996）を参照した。

パレートの理論に関する解説として、フロイント（1991）、松嶋（1985）、Bonetti（1994）を主に利用した。フロイント（1991）は政治学

そのような保守と革新の2項対立によって進化が起これ、その理論が社会理論に応用できる可能性を示唆している点である。

パレート社会学は政治過程の社会学でもある。保守と革新、パレートの言うところの集合体の持続の残基と結合本能の残基の比率によって、社会の均衡が生まれてくるという理論は、不均衡進化論の社会観と共通性があると言える。そこで不均衡社会進化論という社会の見方を提唱し、社会の情報化という観点から社会情報学との接合をはかりたい。

者、経済学者、社会学者、そして「不本意な」哲学者としての多面的なパレートの思想に関する解説書である。松嶋（1985）はパレートの経済学から社会学への研究の蓄積を解説した邦語の代表的パレート研究書であり、Bonetti（1994）はパレートの政治思想の解説書であるが、パレート研究の網羅的な入門書としても利用できる。

社会学、特に社会システム論の立場からパレートを論じている文献として、パーソンズ（1986）、富永（1995）がある。

パーソンズ（1986）によれば、パレートは単線的な社会進化論を拒否しているとされる。パレートの社会理論の特徴はエリートの循環、つまり社会変動論にある。このような指摘を無視することは出来ない。しかし、パレートの社会観は複数の因果関係による相互依存的な社会変動論であり、複線的な波状運動による一種の社会進化論と捉えることも出来る。社会は、自

然科学と違って進歩はしないが、複雑な変動を行い、変化してゆく。これを「社会進化」と捉えたい。パーソンズはパレートの社会変動論に社会的不安定性を伴うことを指摘している。行為システムの構造という視点も含めて、パレートの『一般社会学概論』の英訳が出版されて数年の間に『社会的行為の構造』を書き上げたパーソンズの視点は重要である。

また富永（1995）も社会システム論に関するサーベイとして無視することは出来ない。力学的社会システム論としてのパレートの論から、パーソンズ、ルーマンの社会システム論に至る流れ、オートポイエシス理論などの言及は重要である。

社会進化論に関連する文献としてオールドリッチ（2007）が挙げられる。オールドリッチは企業レベルの分析に進化理論を応用している。オールドリッチは組織の突然変異、選択、保持、生存闘争という視点から組織の進化を分析している。保持という概念は、我々の視点ではDNAなどの複製概念と解釈できる。生存闘争（競争）の概念は資本や正統性に関わる競争と説明

されており、経済的利害や派生としての権威の分析に対応する。オールドリッチの研究は社会的コンテクストを重視し、多くの事例調査に基づいた優れた研究であるが、我々の不均衡社会進化理論は、進化の加速という論点や政治過程の社会理論（権力論）という観点がある。

従来の「社会進化」概念は、社会システムが社会の情報化などの進展によって複雑化するという見方や、社会を構成するシステム-環境間の複雑性の縮減が特徴であるという見方や、社会の変異に伴い、その変異の中から選択が起るとい見方がある。パレートの「社会進化」に対する見方やそれに近い我々の不均衡社会進化の見方は、社会システムは確かに複雑で、差異性や異質性を持っているが、その社会システムの異質性は増大して不安定性を示すこともあれば、同質化して硬直化することもある。つまり社会システムは「進歩」も「退化」もしないが、常に変動し、動的な不安定性を内在している。このような社会システムの変動を広い意味で、「社会進化」と捉えて、不均衡社会進化について論じてみたい。

## 2. パレートにおける「社会的不均衡」概念の持つ意義と再評価

### 2.1 社会的異質性の増大と社会変動

社会を構成する人々は知的要素、倫理的要素、行動力や性格、体力、性別などあらゆる面で差異性を持っている。このような差異性はパレートの言葉では社会的異質性と呼ばれる<sup>(2)</sup>。このように異なった価値観や倫理観などあらゆる要素で差異性を持った人々の間で、その勢力に折り合いをつけて社会が安定的な状

態で止まっているとき、その社会は社会均衡の状態にあると言える。逆に価値観や倫理観などの異質性がもつて、社会集団の中でさらに異質性や差異性が増大してゆく「社会的な不安定性」の存在は問題である。

現代社会は社会的異質性の増大（社会の情報化）によって特徴付けられる。そして、社会的

異質性の増大は、社会階級の変動を生み出す。

いったん社会均衡の状態に収束した社会は、そのまま硬直化し結晶化するか、あるいは別の社

## 2.2 パレートにおける社会均衡

社会均衡とは、人々の間での社会的な差異にもとづく諸力の相互依存関係をバランス化している状態である。経済均衡は主に人々の利害や合理的行動がもとで決定されると考えられるが、社会均衡は利害や合理的行動ではないものの、それは感情や非論理的行為と呼ばれるが、の影響を強く受けて決定されている<sup>(3)</sup>。

ローザンヌにおいてワルラスの研究を引き継いだパレートは古典力学の世界観を経済均衡に応用する一般均衡理論によって経済現象の相互依存関係を明らかにした。社会現象の相互依存関係によって社会的な均衡が生まれている。社会均衡の概念は経済学における一般均衡の概念を社会学に拡張したものだ<sup>(4)</sup>。経済均衡は利害の相互依存関係によって決定されるが、社会均衡は利害だけではなく、感情や政治的要素、イデオロギー（主観的信念）などの影響を受けている。また社会学における利害には経済的な富だけではなく、権力関係も含まれる。

社会均衡を決定する要因は、残基、派生、利害、社会的異質性とエリートの周流（循環）の4つの要素の相互依存関係からなる。残基とは非論理的行為を構成する人間精神における不変の定数項ないし原理である。派生とは残基を覆い隠すような似非論理であり、残基を説明・演繹するものであり、変化に富む。一般均衡理論では、需要と供給、消費と生産に関する連立方程式によって記述される。数値化が難しい社会システムの分析に

会均衡に移動するか、あるいは社会均衡から離れ、無秩序的・無政府的な状態になってしまう。

パレートは残基、派生、利害、社会的異質性とエリートの周流という4つの要素（変数）を組み合わせ、あたかも連立方程式のように分析を行った。この4つ要素の中で特に大きな要因の一つに、結合本能の残基と集合体の持続の残基の比率がある。革新と保守の割合、結合本能の残基と集合体の持続の残基の比率には各社会に最適な値が存在するだろう。社会的異質性とは社会を構成する人々があらゆる分野・能力で異なっており、支配層（エリート）と被支配層の2つに分かれていることを指している。エリートの周流とは、支配層に常に被支配層から新しいエリートが補充され、退廃したエリートが排除（選択・淘汰）される循環過程を指している。パレートに言わせれば、「歴史は貴族階級の墓場である」となる<sup>(5)</sup>。

残基は6種類、派生は4種類ある。残基は結合本能、集合体の持続、外的行為による感情表現の欲求、社会性に関連する残基、個人とその従属物の統一性、性的残基からなる。派生は断言、権威、感情ないし原理の一致、言葉の上の証明からなる。

6種類の残基の中で、特に重要であるのは結合本能と集合体の持続の2つの残基である<sup>(6)</sup>。革新と保守と言い換えることも出来よう。結合本能とは新しい組み合わせや要素を社会にもたらそうとする人間の革新的な側面を指し、集合体の持続とは既存の社会集団（グループ）を維持しようとする人間の保守的な側面を指している。



外的行為による感情表現の欲求には結合のうちに自己を表現する何物かをなさんとする欲求が含まれ、結合本能、つまり新しい組み合わせを生み出そうとする革新の側面と強い整合性がある。既存の社会集団、つまりグループを維持しようという側面は、社会生活と関連するいわゆる社会性や、個人とその所有物の統一性（保全）の残基と高い共通性がある。個人とその所有物の統一性の

残基は、社会均衡を保持しようとする感情を含む。性的残基は、革新・保守の残基のグループのどちらに属するとも決め難いが、パレートも残基の最後に分類しているように、社会分析上の重要性は若干低い。パレートは結合本能（革新）と集合体の持続（保守）の2つの残基の比率が重要であるとして集中的に議論しているので、我々も彼にならうことにする。

### 2.3 パレートにおける社会的な不均衡と社会システムの変動

パレートの理論は経済学においても社会学においても均衡概念を重視し、不均衡と言う言葉を使うことはほとんどない。しかしながら、我々はここでパレートの社会理論における不均衡の側面を指摘しなければならない。

パレートにおける「社会的な不均衡」とは社会均衡の変動、つまり一種の循環の不安定性と、社会システムそのものの崩壊の可能性の2つの要素を含んでいる。社会均衡間の変動の不安定性と、社会均衡の累積的な変動による社会

システムの崩壊の可能性である。

パレートは社会システムの崩壊の可能性を指摘している。つまり仮に結合本能の残基が臨界点を越えて優越する社会は無秩序・無政府的状态に陥り、集合体の持続の残基が臨界点を越えて優越する社会は結晶化ないし硬直化してしまう。極端にイノベーションが発生する社会はカオス的ないし不安定的であり、高齢化社会のようにまったく社会に流動性を欠く状態は柔軟性を欠いてしまい、問題がある。

### 2.4 パレート社会変動論の意義と課題

パレートの社会変動論は循環的であり、進歩を連想させるという意味での社会進化論を拒絶している。パレートは『一般社会学概論』（1923）において「社会システム」という用語を用いている（§ 2066, UTET版ではp.1959、仏語全集版ではp.1308）。パレート社会学はパーソンズによって社会システム理論に位置づけられた。確かにパレートの時代には社会システム理論という概念はなく、パレートは古典力学的な世界観を「社会システム」という言葉で社会学に持ち込んだ。それをアメリカの

社会学界に本格的に社会システム理論として導入したのがパーソンズの業績である。

パレートは経済学における方法論的個人主義、主観的序数的効用理論の立場から、社会学においては、社会の客観的基数的効用を考えるようになった<sup>(7)</sup>。つまり方法論的個人主義の枠を乗り越えようとした。パレートはその社会学において、現代の社会的厚生関数の概念に通じる議論をしている。

パレートは時に、ファシズムの先駆者として批判されることがある。このような背景には、

方法論的個人主義の枠を超えた彼の理論の問題点がある。

パレートは歴史上の社会均衡を論じたが、彼の社会観は循環的であり、構造変動の視点を持たない。科学技術は進歩するかもしれないが、社会、特に政治過程は循環的である。さらにパレートの政治理論、エリートの周流論は、「歴史は貴族の墓場である」というように適者であっても次の適者と交替し、生者必滅というべき理論体系になっている。

パレートは非論理的行為を分析しようと試みた。自然科学の方法論、つまり論理・実験の方法によって、非論理的行為を分析しようとしたことには、矛盾があると言えるかもしれない。パレートのいう非論理的行為は、株式市場にお

ける投機家の行動が、感情や性格の影響を受けてしまうことに代表される。パレートの残基やケインズのアニマル・スピリットのような非論理的な要素によって、投資のような本来合理的であるべき経済行動も影響を受けてしまう。現代の経済学は、必ずしも合理的ではない経済行動を限定された合理性や近似合理性という概念で分析している。限定された合理性は、経済主体が最適化ではなく、満足化原理に従っていることを分析している。近似合理性は、最適化において、テイラー展開における二階のオーダーの要素が強く働き、近似的な最適点で経済行動が行われることを分析している。パレートの分類した「非論理的行為」を論理的に分析することは、今後の経済学の課題でもある。

### 3. パレート社会学から社会情報学へ

#### 3.1 差異の拡大としての情報化

差異と情報はどのように異なるのだろうか？ 差異とは違いであり、情報とは知らせや意味を持った記号の集合や、遺伝子や文化子を指している。社会的異質性ないし社会的差異性とは、社会的な変異の蓄積を指している。社会情報とは社会における情報であり、現代社会においては差異と情報はほぼ同義である<sup>(8)</sup>。現代社会において如何にして差異性を生み出すかということは、どのようにして情報ないし情報財を生み出すかということほぼ等しい。社会においては同質化と差異化という2つの運動が常に行われている。同質化は社会の構成要素が異なって

いるから行われ、差異化は既にある社会の差異をより拡大させるために行われる。つまり社会的差異は社会にとって基本的な要素である。

社会情報の中には法（制度）、言語、貨幣などが含まれる。法や言語、貨幣というものは人間の遺伝子に直接書き込まれている訳ではなく、人と人との対話や交渉、つまりコミュニケーションによって伝達されている。生まれながらにして法、言語、貨幣の使い方を知っているものはいないが、社会の生活の中で人はそれらの使い方を覚える。つまり法、言語、貨幣は一種の社会的媒介（メディア）である。



### 3.2 情報社会における革新と伝統維持の対立と進化

経済学の視点から見ると、差異性は利潤を生み出す源泉である。つまり新しい情報や質の違い、技術や組織などを生み出すところに利潤は集まってくる性質がある。このような性質を積極的に利用できるのがシュムペーター的な企業家である。自ら差異性を生み出し、統合・結合する企業家は革新（イノベーション）を行う。パレートの言葉を借りれば、シュムペーター的な企業家は結合の本能（の残基）に富み、新しい社会的要素を生み出すリスク愛好的な主体であると言える。

パレートは結合本能に富む経済主体を投機家（投資主体）と呼び、集合体の持続の残基に富む経済主体を金利生活者（貯蓄主体）と呼んで

区別している。この投機家と金利生活者の分類は、ケインズの分類に通じるところがある。投資主体である投機家は低い利率を好み、貯蓄主体である金利生活者は高い利率を好む。このような場合に、投資主体と貯蓄主体の望む利率にギャップが生じて、実際にマクロの投資と貯蓄が乖離する可能性がある。このような議論に先鞭をつけたのが、パレート社会学の経済学的な含意の一つである。

パレート社会学と新結合に代表されるシュムペーターの経済発展論を繋ぐことや、パレートのマクロ社会学とケインズのマクロ経済学を繋ぐ論点を見いだすことは、今後の重要な課題である。

### 3.3 構造的不均衡の視点導入

パレートの社会観は、その富の分配理論のように、構造的不均衡の視点が存在する。彼の社会学は連立方程式システムの世界観を社会に応用した社会均衡の理論が中心であるが、その社会観は構造的不均衡という視点で構成される。

社会を構成する人びとがありとあらゆる要素

で異なっており、異質性を持っている。そのような社会的な異質性の分布は非対称であり、いわゆるパレート分布をしている。社会における構造的な異質性の非対称な分布は、構造的不均衡と言ってもいいだろう。

### 3.4 構造的不均衡による社会進化

差異性の増大過程を社会の情報化として捉えようと、パレート社会学の基本概念である社会的異質性とエリートの周流という分析道具が現代社会の分析にも応用できることに気づく。社会的異質性とは社会システムにおける変異の蓄積を指し、エリートの周流は選択過程を示している。つまりパレートの社会学とは社会システムの進化論を形成している。人間社会における遺

伝的要素は文化子であり、異なった文化子の蓄積と選択が常に行われている。つまり社会の差異化（情報化）と情報の選択（淘汰）過程が同時におこなわれているのがパレートの社会システム論であり、現代的には一種の社会進化論として整理が出来るだろう。パレートの社会学は、総合的社会科学ないし学際的社会科学として理解できる。

## 4. 不均衡社会進化論へ向けて

DNAの複製過程における保守と革新の葛藤を分析している不均衡進化論は社会進化論にも拡張ができる。社会における保守と革新の葛藤を分析しているのは、既に見てきたようにパレートの社会学である。革新の趣に富む結合本能の残基と保守を代表する集合体の持続の残基の競合関係がパレートの社会システム論である。パレート社会学は残基、派生、経済的利害、社会的異質性とエリートの周流の4つの基本要素の循環・相互依存関係として表される。革新と保守の葛藤、それを覆い隠す似非論理、経済的利害、様々な社会的な差異性をもった人びとの間での競合、循環がある。社会的異質性の背景には社会を構成する人びとの非対称的な分布、社会的な不均衡が存在する。社会的な不均衡は、経済的不均衡（ここでは所得分配の不均衡）のみならず、社会的な差異性のあらゆる分布に見いだすことができる。つまりパレートの社会学を不均衡進化論と結びつけることで新たな社会情報学が展開出来るのではないだろうか。

不均衡進化とは差異性や情報の非対称性のもとで社会がより差異を増大させる方向への動き（革新、結合本能）と社会が差異を解消し同質化へ向かう動き（保守、集合体の持続）の葛藤による社会システムのダイナミズムと理解出来る。

## 5. まとめと今後の課題

課題設定としてパレート社会学を社会情報という観点から読み直すことと、不均衡進化論との接合を行うという2つの課題を挙げた。

社会システムにおいては主観と客観、消費と生産、需要と供給といった非対称的な要素が均衡にある時は向かい、ある時は離れ、その繰り返しを行う動的均衡および動的均衡からの乖離である不均衡によってシステムの長期的な波状運動（進化）が起っていると解釈できるのではないか。

生物学における不均衡進化論の特徴は、進化が初期値依存性を持つことを指摘していること、進化を加速するという観点があること、不均衡進化という遺伝子の戦略がいわゆる不敗の戦略であることだ。

不均衡進化論を社会進化に応用すると得られる知見は、社会変動の初期値依存性（歴史的な経路依存性）や、社会や経済構造が一定のストレスを受けることで、反動的に社会進化が加速する可能性があることや、変異つまり進化の要素と、保守つまり遺伝の2つの要素によって、社会環境の変化に対して、柔軟に対応できる可能性があることだろう。

生物学上の不均衡進化論は、科学的な仮説の一つである。実験などによって論証されなければならない。そして、社会システムの変動理論に不均衡進化論を適用するという試みも、検証されるべき一つの考え方であろう。

パレート社会学は社会的異質性の非対称的な分布、つまり社会的差異性ないし社会情報の拡大過程の分析として読み直すことができる。

またパレート社会学は、保守と革新、パレートの言葉を使えば、結合本能の残基と集合体の持続の残基の競合過程として分析することができる。パレート社会学は一種の社会進化論であり、残基の非対称的な分布や、社会的異質性つまり人びとの各種能力などの非対称的な分布は、社会的不均衡と読み返すこともできる。つまりパレート社会学と不均衡進化論を接合することで、不均衡社会進化論を展開することができるのではないだろうか。

情報爆発と呼ばれる程に情報通信技術の発達により社会システムの情報化が進展してきた<sup>(9)</sup>。その中でパレートの社会システム論、これは一種の社会進化論・社会変動論であるが、を分析することで、現代社会における人間のあり方のモデルを考察することができる。パレートの社会理論はマクロ社会学に分類されるが、この理論とシュムペーターの経済発展論や

ケインズのマクロ経済学との理論的な関係を比較・検討し、明らかにすることで、学説史的にも重要な知見が得られるだろう。

パレートの結合本能の残基の議論はシュムペーターの新結合の議論と高い関連性がある。またパレートの投機家と金利生活者の分析はケインズの議論を先行している。パレートの社会効用の理論は、現代的には社会選択論に分類される。これらが経済学的なパレートの社会理論の知見である。

パレートの社会論がパーソンズを經由して現代の社会理論にも強い影響を与えていることを指摘しておこう<sup>(10)</sup>。残念ながらルーマンはパレートの著作を直接言及しないが、思想的にはパレートはルーマンの先行者である<sup>(11)</sup>。パレートの理論とルーマンの理論の断絶を埋めることは今後の課題である。

## 謝辞

匿名のレフリーからいただいた貴重かつ丁寧なコメントに感謝いたします。なお、残りうる過ちは全て筆者の責任である。

## 註

- (1) パレートの社会理論が社会的差異の増大という視点から社会の情報化に応用できるという視点は、パレート『一般社会学提要』姫岡勉訳、板倉達文校訂（1996）、校訂者あとがき、p.384を参考にした。
- (2) 社会的異質性の定義に関しては、Pareto（1906）、第7章 § 2. p.268を参照した。
- (3) 論理的行為とは主観的にも客観的にも手段と目的が論理的に結合している行為をさす。そうではない場合は、非論理的行為に分類される。必ずしも論理的行為と経済学でいう合理的行動が一致するとは限らない。
- (4) 一般均衡とは経済システムにおける全ての財の需要と供給の相互依存関係を分析する。それに対して部分均衡とは、ある一つの財の需給のみを取り上げて分析する手法である。
- (5) Pareto（1920）、p.372. § 806を参照。
- (6) 大まかに分類すると外的行為による感情表現の欲求の残基は結合本能、社交性に関する残基と個人およびその従属物の統一性の残基は集合体の持続の残基と重なる部分大きい。
- (7) パレートの社会選択理論を説明すると、経済学では集団におけるオフェリミタ（主観的効用）の極大、つまりパレート効率性についてのみパレートは議論している。社会学ではパレートは客観的効用というものを考えているので社会にとっての効用の極大と、社会の効用の極大という2つの概念について議論している。
- (8) 差異と情報に関する論考としては、岩井（1997）、第1章、pp.9-33を参照した。

- (9) 情報爆発と社会システムの関係に関しては須藤 (2007) を参照。
- (10) パレートの「社会システム」という概念は、パーソンズによって社会システム理論として体系化されアメリカの社会学界に導入された。パーソンズの影響を受けた現代の社会学者にも影響を与えている。しかしながら、現代社会学を代表するルーマンは直接パレートの著作を参照することはない。
- (11) ルーマンの社会システム理論に関する著作は、ルーマン (1993a) (1993b) を参照した。ルーマンも結合概念の重要性を指摘している。現代の社会学を研究するものにとって、無視できない文献である。特にオートポイエシスの概念や、環境-システム間の複合性の縮減の概念は無視することは出来ない。

## 参考文献

- 岩井克人 (1997) 『資本主義を語る』ちくま学芸文庫
- オルドリッチ、ハワード (2007) 『組織進化論』若林直樹、高瀬武典、岸田民樹、坂野友昭、稲垣京輔訳、東洋経済新報社
- 須藤修 (1995) 『複合的ネットワーク社会』有斐閣
- 須藤修 (2007) 「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」人工知能学会誌22巻2号, pp.235-240.
- 富永健一 (1995) 『行為と社会システムの理論』東京大学出版会
- パーソンズ, T (1986) 『社会的行為の構造 2』稲上毅、厚東洋輔、溝部明男訳、木鐸社
- パレート (1987) 『社会学大綱』北川隆一、廣田明、板倉達文訳、青木書店
- パレート (1996) 『一般社会学提要』姫岡勉訳、板倉達文校訂、名古屋大学出版会
- 古澤満 (2010) 『不均衡進化論』筑摩書房
- フロイント, J (1991) 『パレート-均衡理論-』小口信吉、板倉達文共訳、文化書房博文社
- 松嶋敦茂 (1985) 『経済から社会へ：パレートの生涯と思想』みすず書房
- ルーマン, N (1993a) 『社会システム理論 (上)』佐藤勉監訳、恒星社厚生閣
- ルーマン, N (1993b) 『社会システム理論 (下)』佐藤勉監訳、恒星社厚生閣
- Bonetti, Paolo. (1994) *Il Pensiero Politico di Pareto*, Roma, Bari, Editori Laterza.
- Keynes, John Maynard. (Original Publication 1936). *The General Theory of Employment, Interest, and Money*, Macmillan, London. 1973. (The Collected Writings of John Maynard Keynes. Volume VII.)
- Pareto, Vilfredo. (Original Publication 1896-1897). *Corso di economia politica*, a cura di G.Palomba, nota bio-bibliografica di G.Busino, Torino, UTET.1971.
- Pareto, Vilfredo. (Original Publication 1906). *Manuale di economia politica*, Padova, CEDAM.1974.
- Pareto, Vilfredo. (Original Publication 1917-1919). *Traité de Sociologie Générale*, édition française par Pierre Boven, revue par l'auteur, préface de Raymond Aron, Genève, Librairie Droz. 1968. (OEuvres complètes de Vilfredo Pareto ; tome XII)
- Pareto, Vilfredo. (1920). *Compendio di sociologia generale*, per cura di G.Farina, Firenze, Barbera.
- Pareto, Vilfredo. (Original Publication 1923). *Trattato di Sociologia Generale*, Torino, UTET. 1988.



村館 靖之 (むらだて やすゆき)

1979年9月  
 [出身大学又は最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府博士課程  
 [専攻領域] 情報の経済学、社会情報学  
 [主たる著書・論文] (3本まで、タイトル・発行誌名あるいは発行機関名)  
 「新ケインズ派モデルと情報の経済学」(2011) 情報文化学会誌 VOL.18.2, pp.11-18  
 「情報と不均衡の動学理論」(2009) 情報学環紀要 情報学研究 VOL.76, pp.83-98  
 [所属学会] 日本経済学会、社会情報学会、情報文化学会

# From Paretian Sociology to Socio-Informatics.

Yasuyuki MURADATE\*

## Abstract

This paper discusses the application of the Pareto's Sociological Theory to Socio-Informatics. In the view of social heterogeneity, modern society is characterized by an increasing process of social differences. In the Pareto's Sociological Theory, there are four key concepts: Social Equilibrium, Social System, Residue, and Derivative. Social Equilibrium is application of General Equilibrium concept to Sociology. Social System means the Society as a whole. Residue means the basic human social instinct. Derivative means the veil of human instinct. This paper shows that social differentiation processes and selection of information exist in Pareto's Sociology. The Pareto's Sociological Theory can be interpreted as a Social Evolution Theory of Information.

---

Sudoh's lab, Graduate School Interdisciplinary Information Studies, University of Tokyo.

**Key Words** : Pareto, social heterogeneity, efficiency, social equilibrium, social evolution.